

吾衍『字古編』の版本とその流伝考

高野山大学文学部〔書道担当〕 助教 野田 悟

一、はじめに

元の吾衍¹⁾が大徳四年（一二〇〇）に著した『字古編』は、今日の書字に多大な影響を与えた彼の代表作とも言える。その上巻に当たる「三十五挙」は、中国印学史の嚆矢として名高い。この著作は、現代の中国書道史及び篆刻史において非常に高い地位を占めており、それが一旦世に出ると広く利用された。その後には作られた版本の多さからその貢献度はうかがい知ることができよう。しかしその版本は種類が多く、それぞれが中国各地に散在しており、これまでその研究には大変な支障があった。

本論稿は、筆者の中国美術学院博士論文「吾衍与其『字古編』之研究」の中の特に版本流伝とその変化の部分を日本語に翻訳し、且つ多少修正を加え、このたび掲載させて頂くものである。

二、近現代における『字古編』研究の総括

『字古編』は上下二巻に別れており、その上巻は「三十五挙」、下巻は「合用文籍品目」とあり、またその後ろに附録を添える。その「三十五挙」の内容は、識篆・習篆・書篆・篆法・章法・印史等に関連しており、書体の正しい変遷、書篆や模刻の方法や多少の論を述べたものである。「合用文籍品目」は、小篆品・鐘鼎品・古文品・碑刻品・附器用品・辨謄品・隸書品・字源七辨の八つの項目に分類、集成され、印学知識の論述が簡潔にまとめられている。附録部分は、大方において世存古今印譜式・摸印四妙・洗印法・印油法・取字法の五則が存在するが、版本によりかなりの違いが見られる。

吾衍が『学古編』を編撰した主な目的は、写篆法と篆写印文の認識に総括されており、中国文化における具体的教学の中心であることを意味している。『学古編』が世に問われて以来、世間の人々に注目され、また今日まで彼にたいする研究も中断されたことはなく、これらの研究は、基本的に二つの部分に集中している。ひとつは吾衍の芸術思想、生卒年月、姓氏本名及び出身地の研究、もうひとつは『学古編』の本文研究、そして印学界が最も注目する第一卷「三十五挙」の研究である。

管見によれば、これまで「三十五挙」に対する研究は、陳国成氏による「吾衍『三十五挙』疏評」が最も詳しく内容も豊富である。まず陳氏は『学古編』研究における中国の主要研究論著七編（其中で「三十五挙」のみをピックアップして論じているものは六編）を以下の如く列挙している。其の一、「清」姚観元（？一八八三）「『三十五挙』校勘記」、其の二、程二如「『三十五挙』新探」、其の三、馬国権「篆刻經典『三十五挙』図釈」、其の四、馬国権「統『三十五挙』八種述評」、其の五、朱関田「『三十五挙彙編』序」、其の六、蕭高洪「吾丘衍的印論及印章芸術」、其の七、劉清揚「吾丘衍『三十五挙』略論」。陳氏はこれらの論述を「『三十五挙』研究一覽表」としてまとめ、そこに「基本観点」と「評価」加えてある。ただ、陳氏は十五種の『学古編』版本を五つの体系に分類して、どうして『学古編』版本の『夷門広牘』本、『広百川学海』本、『歴代印学論文選』本、姚氏『校勘記』の四種のみで校勘を行われたのか、筆者が疑念を抱くものである。陳氏はこの四種の版本を列挙し、次のように申されている。

其中、唯『夷門広牘』本体系最佳、据為原本、序跋附詳、遠勝他本。其次如『広百川学海』本亦属明刊本、明馮可賓輯、清嘉慶十年（一八〇五）清張照曠閣刊本、与『広百川学海』本内容相同。当是以『広百川学海』本為底本、影響也較大。――

（その中で、唯一『夷門広牘』の系統が最も優れてあり、原本に沿っており、序や跋も詳しく付されていて、他の本に大きく勝っている。その次は例えば『広百川学海』本もまたその系統に属する明代刻本で、明の馮可賓の編集である。また清代嘉慶十年（一八〇五）、清の張海鵬が編集した『学津討原』照曠閣刊本は、『広百川学海』と内容もおなじである。それはまさに『広百川学海』を底本としており、大きな影響を受けている。）

陳氏は、『東門広牘』本の系統が最佳と判断したのは、序文収録や附録内容の多さのみの理由からであろうことが推測でき、実際この四種以外でも、研究資料としての重要な版本があるにもかかわらず、どうしてそちらにも眼を向けなかったのか、また実際の研究対象として、それぞれの『学古編』の版本を直に見られたのかは、はなはだ疑問が残る次第である。

この「三十五挙」のみならず、第一巻に位置する「合用文籍品目」も書字や書道教育においては、これまで注目されにくかった重要な部分である。前に中国最初の「篆刻に関する論述である『三十五挙』」、後ろに「書道教育に関する『合用文籍品目』」を配置することにより、この『学古編』の出現以降、理論の側面から見れば、これまで完全に分裂していた書道学と篆刻学の密接な関連性を立証しようとした点では、今日に至る非常に大きな貢献であると考ええる。

すべての『学古編』の研究で、唯一上海図書館に蔵される繆荃孫（一八四四—一九一九）校による清抄本『学古編』一卷は、当時の研究を知る上で、必ず見るべき資料の一つであるが、繆氏は『学津討原』本を底本に、同時に関連書籍を用い、対校・他校・理校などの多種の校勘法を採用している。同時代の姚観元「『三十五挙』校勘記」と比較して見ると非常に似通っている部分が多く、姚氏は繆荃孫を模倣していると考えられる。陳国成氏は、多分この繆氏抄本の存在を知っていたと思われるが、吉林から上海までの距離は非常に遠く、この方面のデータには限りがあり、彼の論文には言及されていないので残念に思うところである。

そのほかの論文として、蔡宗憲氏の「元代印人吾衍研究」¹²がある。その注釈は、読者に対して理解しやすく書かれているが、論文の題目、吾衍を印人として扱っているとところからして、「三十五挙」を主に取り上げていると思いきや、なぜか主要な部分は「合用文籍品目」に力が注がれており、また『学古編』全体の研究論点からしても、やや薄弱の感が否めない。

韓天衡「吾丘衍氏『学古編・附録』辨偽」は吾衍に関する問題のほかの角度からの研究である。韓氏の文中に、吾衍『学古編』の祖本は、もともと上下二巻のみの記載であり、その附録部分は後の人が添加したものであるという。その附録にある「摸印四妙」、「世存古今印譜式」の破綻、『学古編・附録』は、後代のいわゆる好事家による蛇足であると指摘していて、元来附録は、『学古編』には存在しなかったと断定している¹³。筆者は、『学古編』研究を進めるにあたり、この附録部分に対する角度からさらに一歩進んだ研究を今後の課題としたいと考える。

これまでの研究以外のものとして、例えば黄惇氏「偽托何震的《統字古編》辨訛」における中国印学学者の専門研究がある。彼は、何震の「統字古編」と吾衍の『学古編』を比較し、「統字古編」は『学古編』に対する剽窃であるという興味深い論証を行っている¹⁵⁰。この逆手に取った見解により、黄氏は吾衍『学古編』が非常に価値のあるものだ¹⁵¹と結論づけている。

三、『学古編』版本の概略

『夷門広牘』本『学古編』中に夏溥や危素、また吾衍本人による二篇の序文があるが、その中の夏溥と危素の序文に共通して、吳主一（志淳）の刻本について言及しているところを紹介する¹⁵²。

近吳主一得『学古編』・『周秦刻音釈』・『近代名公書評』、亟刻入板¹⁵³。（夏溥）

（「自分と」親しい吳主一君は『学古編』・『周秦刻音釈』・『近代名公書評』を手に入れ、たちまち板に刻した。（夏溥）

曹南吳君主一篤嗜古学。刻此編家塾、附以吾君『周秦石刻釈音』及『唐宋名人書評』、其用心甚勤。吾君著書之志、庶几有所托于永久、而推明乎。先王之礼楽、吳君亦将有志焉¹⁵⁴。（危素）

（曹南の吳主一君は誠実で古学を特に好む。「彼は」これを刻し家塾にて編み、吾氏の『周秦石刻釈音』及び『唐宋名人書評』を付すことで、「彼に対して」敬意を払い、「仕事に」精を出している。吾氏の著書に対する志は、どうにか永久に伝えられ、世に広めることが出来る。先王の礼・楽は、吳氏が深い志を有している。）

ここに言及されている吳志淳の刻本が、これまで知られている最も古い『學古編』刻本である。「曹南吳君」、即ち吳志淳は、『明史』趙為謙伝⁸及び本書の危素の作った序文の中に見ることができる。

吳君名志淳。奎章閣侍學士蜀郡虞公、翰林侍講學士豫章揭公皆重愛之。故又以虞公「石鼓序略」・「好古齋銘」、揭公隸書行附刻于其後¹⁰。（危素）

（吳氏名は志淳。奎章閣侍學士で蜀郡「出身」の虞先生「虞集を指す」や翰林侍講學士で豫章「出身」の揭先生「揭傒斯を指す」はみな彼をととても大事にする。また虞先生の「石鼓序略」・「好古齋銘」をもつて、揭先生が隸書で書き、その後刻したものを加えた。）

吾衍は、大德四年（一二〇〇）五月二十五日に自ら序文を書いた。危素の序文を付した『學古編』は、至正四年（一三四四）十一月に刊行されており、原本『學古編』の出版より四十四年が経っている。吳志淳は自ら印章の創作を行い、同時にその理論研究も進めていたことが知られている。吳氏好古齋にて刻された版は貢獻度も極めて高かったのである。今日において『學古編』以下、好古齋製のほとんどの版本が存在しないのは、大変残念なことであるが、しかし、その好古齋の刻本で北京国家図書館所蔵である至正六年（一三四六）に作られた『復古編』（図1）は後世に伝わった極めて少ない刻本の一つである²⁰。この好古齋製『復古編』は版本学分野においても当時の版本資料として、軽視できない重要なものであることはいうまでもない。これを見れば当時の好古齋刻本『學古編』の大体の様相を推測する事ができる。

吳志淳は、嘗て吾衍『學古編』の版本を自ら彫ったことがあり、夏溥や危素の序文の歳月の記載により、『學古編』刊行は『復古編』のそれの二年前であることが分かる。またこれは、後世の万暦年間に作成された『學古編』三大版本（ここでは『王氏書苑補益』本・『夷門広牘』本・『宝顏堂秘笈』本を指す）に影響を与えたことが窺い知ることができ²¹、当然、これらは紛れもなくその他の印学著作にも波及しているのが分かる。

図1-① 好古齋刻本『復古編』の扉ページ(その一)

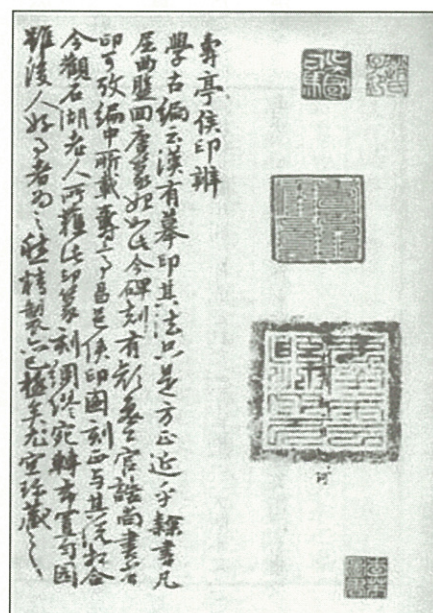


図1-② 好古齋刻本『復古編』の扉ページ(その二)

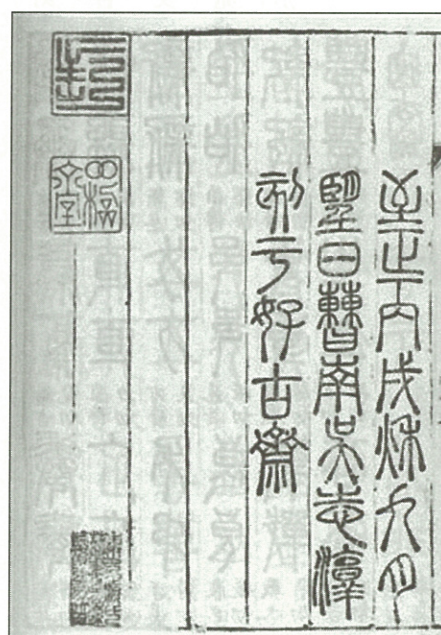
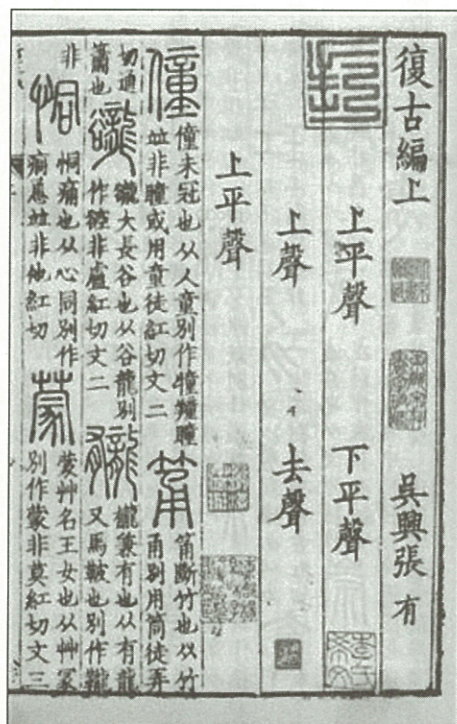


図1-③ 好古齋刻本『復古編』の本文



『両浙著書考』には、『學子占編』に関する版本の紹介があり、「『八千卷樓書目』謂此書有寶顏堂書本・晝苑本・說郛本・學津討原本・篆字瓊著本・広百川本・唐宋叢書本。」²²と記されている。

筆者は、まずこの文献に当たり、次に全国各地において『學子占編』版本を探索した。その際、『両浙著書考』に挙げられていない『夷門広牘』本や『武林往哲』本及び『閑中』本等の版本を偶然にも発見することが出来たことは想定外の慶びであった。

其の後、二〇〇七年に出版された『中国叢書総録』にも吾衍『學子占編』や「三十五挙」の各種版本の概要が以下の如く記載されていた。

學子占編——広百川学海壬集・王氏晝苑補益・宝顏堂秘笈正集・唐宋叢書載集・說郛卷九十七・四庫全書子部芸術類・吾子行二種・學津討原第十五集・篆字瓊著・武林往哲遺著・夷門広牘書・叢書集成初編芸術類²³。

三十五挙——嘯園叢書第二函・咫進齋叢書・吉林探源書舫叢書二集・美術叢書初編七輯²⁴。

しかし、この中で「三十五挙」部分の『美術叢書初編第七輯』部分には、「三十五挙一卷附校勘記」巻」と記載されているものの、実際、浙江図書館古籍部に足を運んで初めて分かったことだが、その内容は、「合用文籍品目」をも含めた『吾丘衍撰『學子占編』一卷』の誤りであった。

中国科学院図書館所蔵『吾子行二種』（清乾隆四十二年竹素山房刊本）の中に収録された『學子占編』と『吉林探源書舫叢書』の中の「三十五挙」の版本は、筆者はまだ見る機会を得ていない。しかし、陳国成氏「吾衍《三十五挙》疏評」には、「『広百川学海』本……『唐宋叢書』・『學津討原』本・『武林往哲遺著』本・『吉林探源書舫叢書』本内容相同、歸于此類。」²⁵（『広百川学海』本……『唐宋叢書』・『學津討原』本・『武林往哲遺著』本・『吉林探源書舫叢書』本はいずれも内容は同じである。」とされている）。

これら以外にも、上海図書館所蔵『繆荃孫校字古編』という非常に重要な抄校本がある。²⁶⁶ この著作の最後のところには、「繆荃孫」の署名があり、彼が光緒乙亥（一八七五）五月の間に抄写したものである。この『繆荃孫校字古編』の底本は『学津討原』、校本は『唐宋叢書』で、その他に『述古印説』と『印典』を参考文献として扱っていることが示されており、それぞれ明人李漁²⁶⁷と朱象賢²⁶⁸の重要な文献を用いて考証していることが分かる。

筆者は、これまで、北京国家図書館、北京師範大学図書館、上海図書館、浙江図書館古籍部、上海図書館、浙江大学西溪校区図書館、南京図書館、湖南省図書館及び中国美術学院図書館等を巡り、明・清・民国の『字古編』版本十八種（二種類の「三十五挙」の版本を含む）を確認することができた。これら以外に、比較的見ることが容易な現代の四つの版本を挙げると次の通りであり、詳細も付け加えておく。

Ⅰ、西泠印社 一九八五年 韓天衡編訂『歷代印学論文選』に収録される『字古編』は、序と跋及び附録は記載されていない。

Ⅱ、上海畫画出版社 一九九四年 盧輔聖主編『中国畫画全書』中収録の『字古編』は、正文の前に危素太僕と夏溥の序、及び吾衍自序が収録される。附録に「『漢印鈕制』」、「世存古今図印譜式」、「印油法」、「洗印法」、「取字法」が掲載されており、他に「金石叙略」及び安処道人、莫浮山樵（羅浮山樵の誤り）、張海鵬作の跋有り。

Ⅲ、上海科技教育出版社 一九九四年 桑行之等編『古玩文化叢書——印説』中に収録されている『字古編』（『篆字瓊著』影印本）は、無序、附録に「世存古今印譜式」、「摸印四妙」、及び「洗印法」、「印油法」、「取字法」があり、また沈喬跋が見られる。

Ⅳ、河南美術出版社 二〇〇二年 王伯敏主編『書学集成』に見られる『字古編』は、唯一吾衍の自序があるのみで、無跋文。

四、『字古編』版本源流考

書籍文献が後世に伝わる中で、それを他人が写し取る過程において、多少の差異が生じ足り、印刷出版の際に誤植が生じたりするのは周知の通りである。『学古編』については、各種版本の考察と対比により、以下の六つの系統に帰することを確認したうえで、最後に系統図を示す。

(1)『吾衍自序』—『学古編目録』—『学古編本文』—(三十五挙・合用文籍品目²⁾)—一附録(洗印法・世存古今図印譜式・取字法・摸印四妙・「李陽氷曰、摸印之法……」)—「沈希跋」の系統は、『学古編』版本の中で最も多い。これには、『宝顔堂秘笈』本(別に『尚白齋鑄陳眉公訂正秘籍』本とも称す)(図2)、『四庫全書』本、『美術叢書』本(図3)、『筆記小説大観』本、『説郭』本(図4)、『広百川学海』本、『唐宋叢書』本及び『篆字瑣著』本(図5)がある。その中で『筆記小説大観』本は『宝顔堂秘笈』本の鈔影印本である。

ただ、吾衍自序の部分より見ると、『宝顔堂秘笈』本、『四庫全書』本、『筆記小説大観』本の吾衍の署名はいずれも、「大徳四年五月二十五日、真白居士吾丘衍子行序」となっている。『美術叢書』本、『説郭』本、『広百川学海』本、『唐宋叢書』本には、「真白居士吾丘衍子行序」と日にちを取り除かれた署名となっている。しかし、『四庫全書』本と『美術叢書』本にはどちらも『学古編目録』がなく、また内容から見て、『美術叢書』本の『学古編』は『宝顔堂秘笈』本が底本であることが推測できる。

このほか、『説郭』本、『広百川学海』本、『唐宋叢書』本の『学古編』は、版下がどれも同じで、『篆字瑣著』本は明らかにそれらのうちのひとつの版本が底本である。その中の陶宗儀編著『説郭』(六十巻)の元来のものは、一三六一年から一三七〇年の間に世に出ている³⁾ので元々は『学古編』は収録されていなかったのである。その後、清順治二年(一六四六)、李際期(宛委山堂)が重刻したときに『説郭』にはじめて『学古編』は第九十七巻に収集された。

馮可賓編輯の『広百川学海』と鍾人傑・張遂辰合編の『唐宋叢書』は明末、明崇禎帝期(一六二八年から一六四四年の間)に刊行されたことが分かった。『説郭』本に『学古編』が含まれたときは、すでに『広百川学海』本と『唐宋叢書』本にはすでに『学古編』は収録されていたことが分かるが、この二種の叢書の成立の前後関係が、今のところ調べるすべがなく明らかではない。しかし、確実なのは『説郭』本、『広百川学海』及び『唐宋叢書』の『学古編』はどれも、『宝顔堂秘笈』本のそれを継承しているという点である。

圖2 『寶顏堂秘笈』本

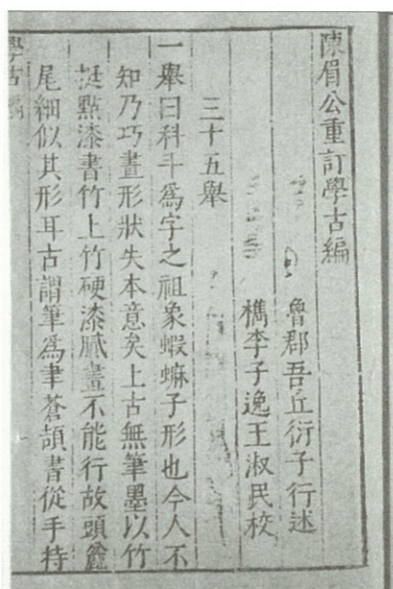


圖4 『說郭』本

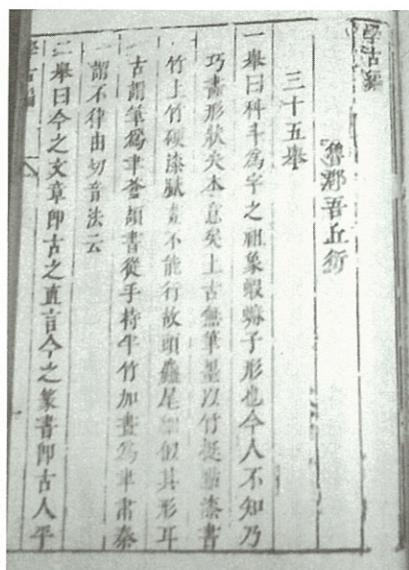


圖3 『美術叢書』本

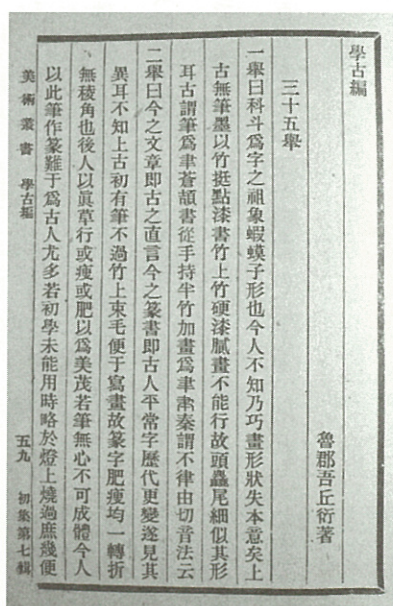
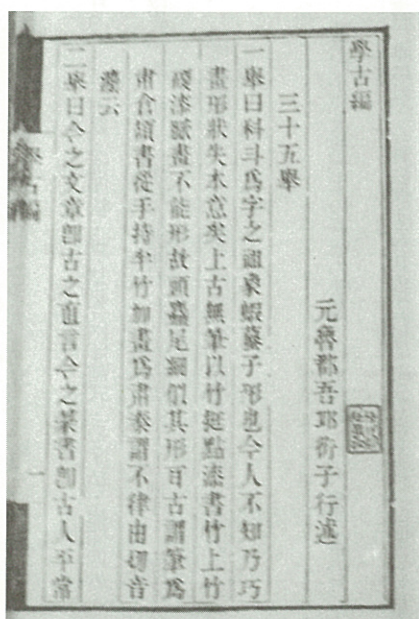


圖5 『篆字瑣著』本



(2)『吾衍自序』—学古編目錄—学古編本文(三十五舉・合用文籍品目)—附録(洗印法・油印法・世存古今図印譜式・取字法・摸印四妙・『李陽水曰・摹印之法……』)—張海鵬跋—の系統は、『学津討原』本(図6)をその底本とし、重要な抄本に『繆荃孫校』本(図7)がある。また『武林往哲遺著』本の『学古編』(図8)も同じ系統である。その『学古編』の附録部分と『宝顔堂秘笈』本、『四庫全書』本の『学古編』附録部分は比較的よく似ている事から、影響を受けている事が理解できるが、ただその最後の跋文部分が同じでないで、これを別の系統に纏める事としたほうが結論に結び付けやすいと考えた。

その三種の『学古編』の『吾衍自序』の前にはどれも「欽定四庫全書提要」と記してあるし、どれも学古編目錄が存在する。『学津討原』本と『武林往哲遺著』本の出版時期から見て、『学津討原』本と『武林往哲遺著』本の二つの『学古編』は、『説郛』、或いは『広百川学海』、もしくは『宋唐叢書』を底本としているのが明らかである。

図6 『学津討原』本

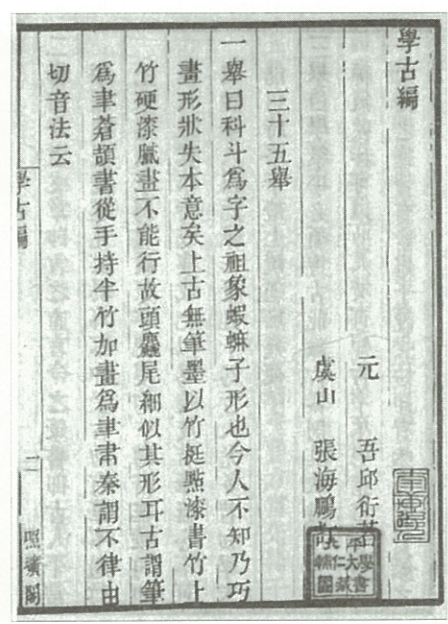


図7 『繆荃孫校』本

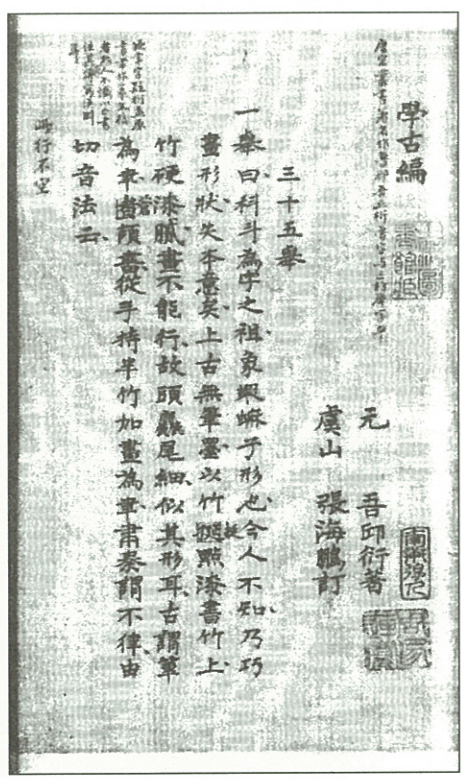


図8 『武林往哲遺著』本

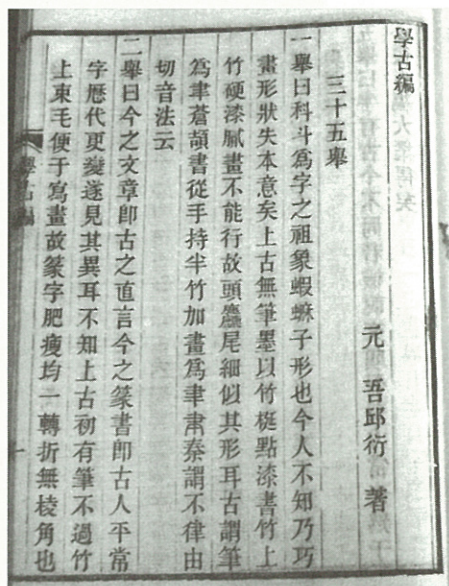
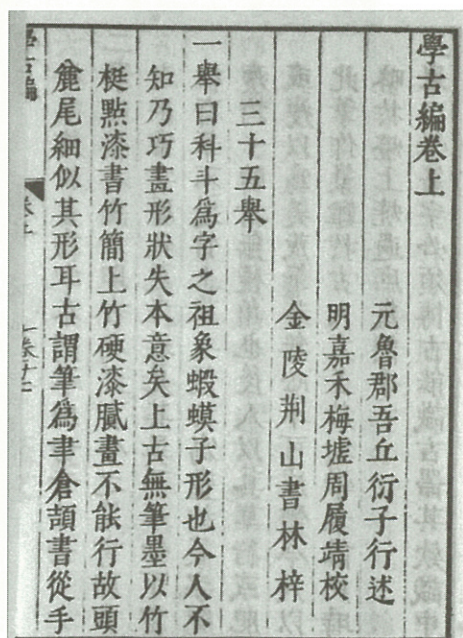


図9 『夷門広牘』本

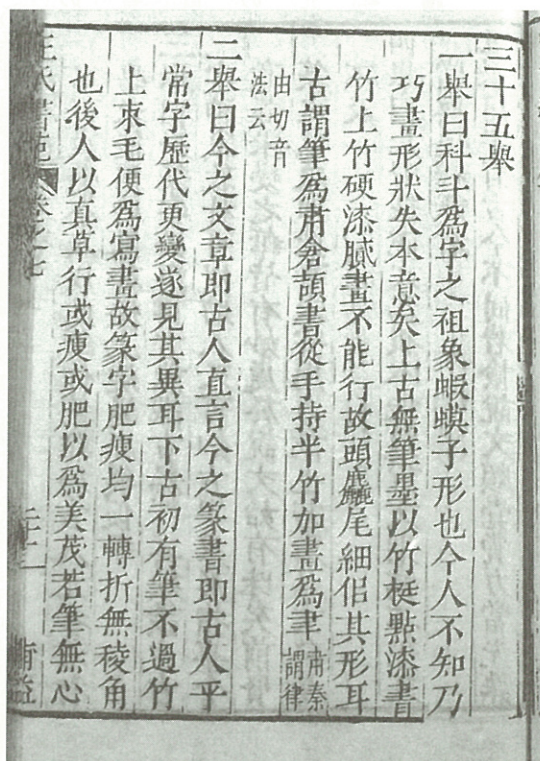


(3)『學古編序』(危素序・夏溥序・吾衍自序)——『學古編目錄』——『學古編』(三十五舉・合用文籍品目)——『附錄』(『李陽米曰…摹印之法』・漢印鈕制・世存古今圖印譜式・油印法・洗印法・取印法)——『金石叙略』——陸深記『安処道人跋』——『夷門広牘』本(図9)の系統である。『叢書集成初編』本はこの影印本である。実はこれらには目錄として、『合用文籍品目』は、挙げられていない。『夷門広牘』と系統(4)の『王氏書苑補益』のそれぞれの『學古編』を比較してみると、前者の方が附録が豊富であることが分かる。そして『中国書画全書』に収録されている『學古編』は『夷門広牘』本のそれを以って底本とされており、それに句読点が施されて印刷されている。これにより同属の系統であることがわかり、その後ろに沈喬跋及び、莫浮山樵(「莫」字は「羅」字の誤り)の署名と張海鵬跋が加えられている。『書字集成』本の『學古編』も、この『中国書画全書』のものを底本としてあり、この系統の一つと数えられる。

(4)『学古編序(危素序・吾衍自序) 一一学古編目錄一一学古編(三十五舉・合用文籍品目) 一一漢印式』は、『王氏書苑補益』本『学古編』の体系である(図10)。これは出版から見ても、『夷門広牘』本より六年早いことが分かる³⁾。またこの系統の目録には、序が排列されていない。附録部分もまた『漢印式』以外は、記録されていない。『王氏書苑補益』本『学古編』の内容より見ても、元々は、教科書的な実用書であったものが、明の万曆十九年(一五九二)以降、通読すべき書籍と認識されるようになったのではないかと、筆者は推測する。『夷門広牘』本と『王氏書苑補益』本のそれぞれの出版された目的が違うのではないかと推測し得るのである。例えば、清代の顧炎武は『日知録』改書の中で、「万曆間人、好多改竄古書。人心之邪、風氣之變、自此而始。」³²⁾(万曆の人は、有名な古書でも多くを改竄している。人心の悪化や、風俗の変化もこの時から始まった。これより始まった。)と述べている。筆者もこの観点は非常に賛同するもので、事実、古書に止まらず、当代の文人により刊行された著作にまでもが、同じように日常的に勝手に書き換えられる運命を辿っている。『好古齋』本『学古編』が存在しない現在、一六〇〇年前後に出版された『王氏書苑補益』本も『学古編』の版本研究の資料としては、極めて重要な刻本であることは否めない。

この系統に包括されるものに『閑中』本『学古編』があるが、この本の内容と簡略された附録から見ても『王氏書苑補益』本のもを底本としていることが明らかである。この版本は、『両浙著書考』や『中国叢書総録』等、版本の検索に簡便書物には一切明記されておらず、また中国大都市の図書館には一切見当たらなかった。筆者が長沙の湖南省図書館に赴いた時、偶然出会ったもので、この版本は非常に少ないことが窺える。その内容をいくらか比較観察してみると、例えば、上巻の「三十五舉」の第二舉、「古」直言、今之篆書、即古人……」のところが「古人」は『閑中』本以外の版本では何れも「古之」と記されている。同じように第六舉では、「篆字多有字……」の「篆字」は、他の版本では「篆書」と書かれており、このような書き換え(書き誤り?)が非常に目立つ。また下巻の「合用文籍品目」に目を向けても、「小篆五則」の「許氏說文解字十五卷」と「倉頡十五篇」の順番が内容重視ではなく、時代順になっている。ほかに「辨謬品六則」の中の「六書古今世戴何……」は他の版本では、「戴何六書故(或いは六書考)」となっており、枚挙に遑がない。『王氏書苑補益』本の「三十五舉」は、第十七、十八、十九舉の順番が時代順に入れ替わっているが、『閑中』本のそれは、『夷門広牘』のを元に内容重視の順番に修正されている。

図10 『王氏書苑補益』本



(5)ここでは、「合用文籍品目」と附録の記載がないもの、つまり「三十五舉」のみ掲載されたもの同じ系統として取り扱った。そのような系統に入るものに『咫進齋叢書』本(図11)、『嘯園叢書』本(図12)、『佩文齋書畫譜』本と『吉林探源書舫叢書』に収録される「三十五舉」である。そのうちの『吉林探源書舫叢書』本のそれは、筆者がまだ目にしたことがないので、ここではとり上げない。

『咫進齋叢書』本の「三十五舉」は清代姚覲元編輯で、光緒九年(一八八三)暹安の姚氏によって刊行された。この本で姚氏序が言うには、「取『唐宋叢書』本之謬誤不可卒業、因以書吾友繆孝廉全孫。成都孝廉錄寄張海鵬本、其謬誤亦同行。」(『唐宋叢書』本の誤りを「すべて」取ってしまうと、「数が多すぎて」作業を終えることが出来ない。そこで手紙を通じて友人の繆孝廉「全孫」に質問した。成都にいる繆孝廉は、張海鵬本を記録した手紙を寄こしたが、その誤りも「『唐宋叢書』本と」同様であった。)

それでも、この記録と実際版本を比較することにより、『咫進齋叢書』本の「三十五舉」は『唐宋叢書』本に一番近く、また『學津討原』本を参校本とし、これらを中心として校勘を行っている。実際に『繹奎係校』本にも、そのメモ書き部分にその二種の版本名がよく登場してくる。

図11 『咫進齋叢書』本

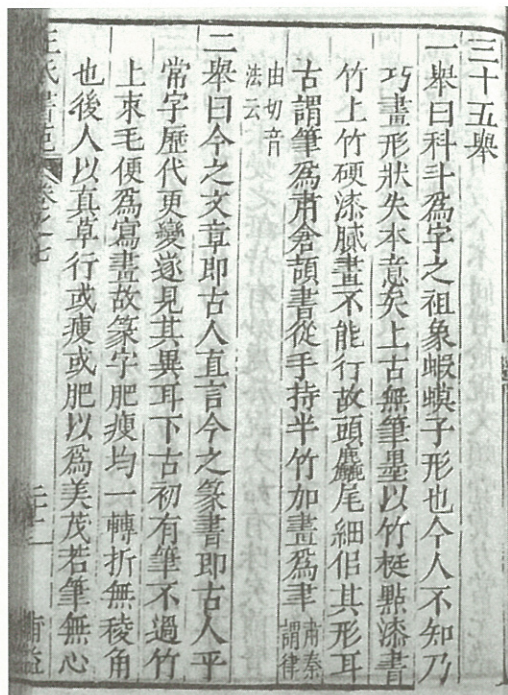
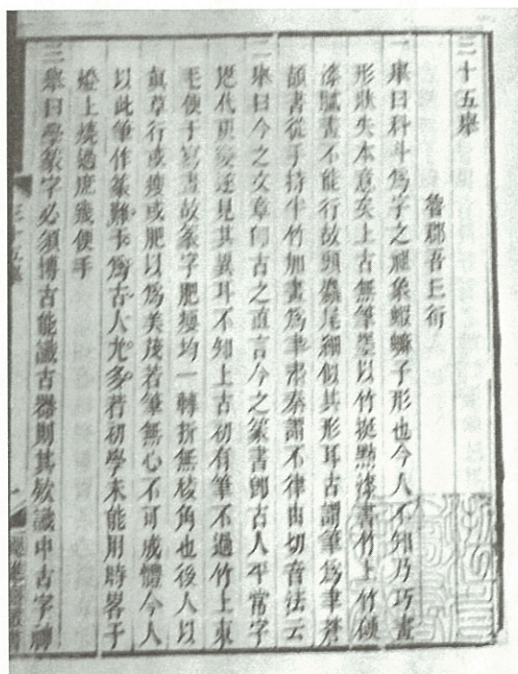


図12 『嘯園叢書』本



『佩文齋書畫譜』本の「三十五舉」は、清代王原祁（清代の有名な画家で、「四王」の一人である。）等が纂輯したものであり、康熙四十七年（二七〇八）内府の刻本である。この第一挙部分は、「秦謂不律、由切音法云。」この段の内容が省略されている。第二挙部分は、「今之文章、即古人直言、今之篆書、即古人平常字……。」となっている。しかしこれと非常に近い『王氏書苑補益』本では、「今之文章、及古人直言、今之篆書、即古人平」（意味からして、『平』字の誤り）常字……。」とある。これまでの版本と比較してみると、「今之文章、即古之直言、今之篆書、即古人平常字……。」と横線のある部分が書き換えられている（書き誤り？）のが分かる。上述の版本以外でも『嘯園

叢書』本の存在とも区別することが出来る。例えば、先ほどの部分で「古」と「直」の間の「人」字が抜けている。その他、大部分の「三十五挙」は、第十七挙「隸書人……」、第十八挙「漢有摹印……」、第十九挙「漢魏印章……」の順番である。しかしながら、『嘯園叢書』本のそれは、内容で判断せずに、時代別に前後を入れ替えたのであろうか、第十八、十九、十七挙の順序に書き換えられている。意味内容からすれば、この順番ではやはりおかしくなる。ほかに、その第十九挙部分の「漢魏印章」を「漢晋印章」（印学的考察からするとやはり「漢魏印章」が正しい。）に改められているところ等、『王氏書苑補益』本と同じであり、それに近い位置であることが分かる。

『嘯園叢書』本の中の『字古編』は、清代葛元煦が編集したもので、光緒三年（一八七七）仁和葛氏の刊行とある。ただこの「三十五挙」は、項目ごとに分け書き並べたものを、別の文体形式に作りかえ、それぞれの「某挙曰」で始まるところを削除してある。第一挙部分は、『佩文齋書畫譜』本と同じように「秦謂不律、由切音法云。」が省略されている。後、第二挙部分、「今之文章、即古之直言、今之篆書、即古人平常字……。」は、『佩文齋書畫譜』本と全く同じである。また、第十七挙から第十九挙までの順序は、『王氏書苑補益』本、『佩文齋書畫譜』本と同じである。つまり、『嘯園叢書』本の「三十五挙」は、『佩文齋書畫譜』本のそれを底本としていることが分かる。しかし、『嘯園叢書』本は第二十七、二十八挙はみな削除されている。

(6)これまで述べてきた『字古編』（または「三十五挙」）以外では、韓天衡編訂の『歷代印學論文選』本に収録されている『字古編』の系統ということになる。これには、吾衍自序や附録及び跋文は掲載されていない。韓氏の序文では、

『字古編』流伝人世近七百年，屢經翻刻，輒抄，版本無計，而舛誤至多，是編據陳眉公重訂本・太末竹素山房本・篆字瓊著本及其它旧本校勘。附録數則，考為後人所統，且少價值，未錄。」³³

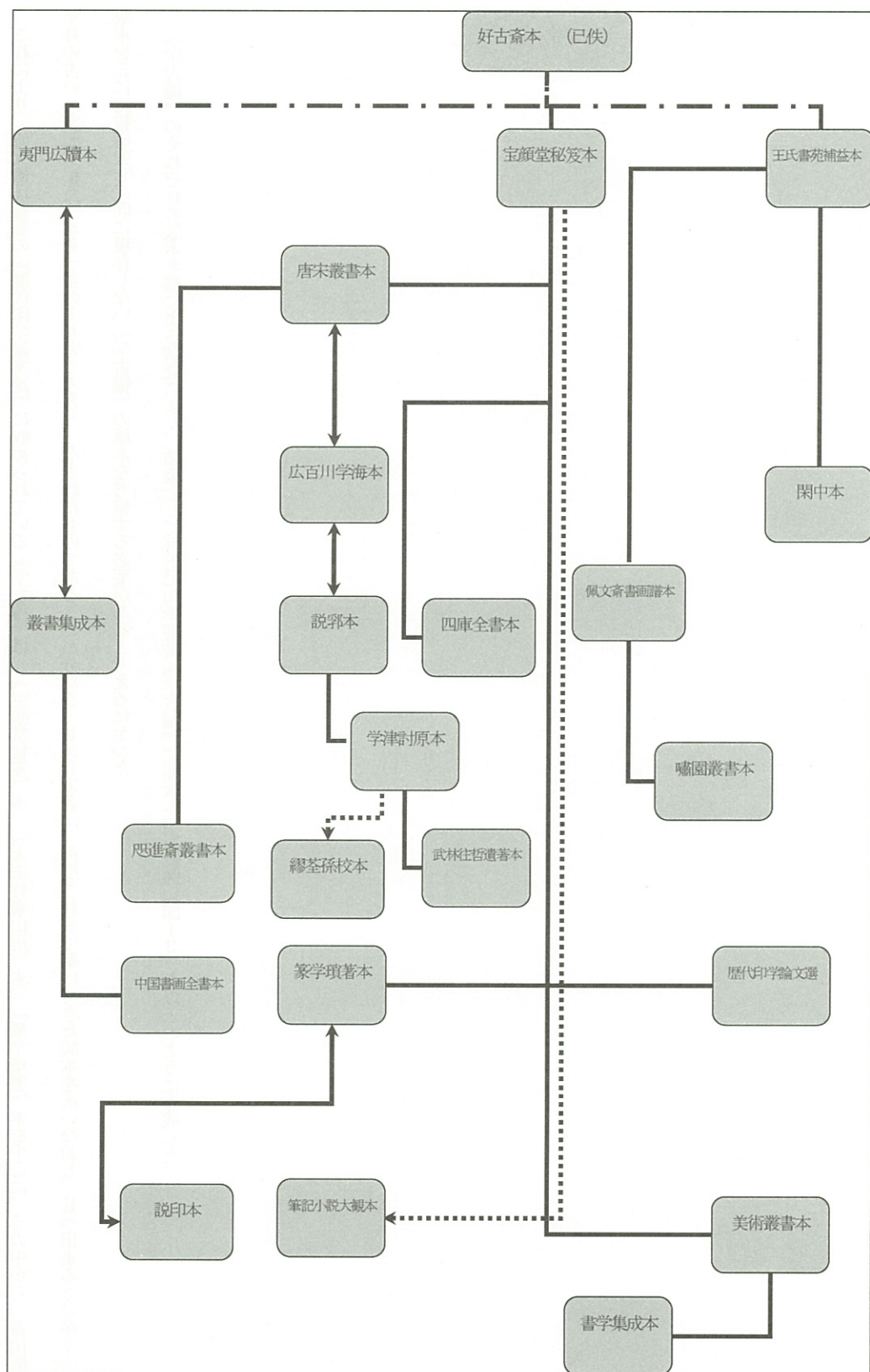
(この世で『字古編』が流布して七百年近くになり、何度となく翻刻され、書写（転写・筆写）され、版本も数えることが出来ないし、間違いも極めて多くなってしまった。これは、陳眉公重訂本・太末竹素山房本・篆字瓊著本及びその他の古書との校勘により編んだ。附録の列挙は、後人によって増補されたものであり、かつ価値が低いと考えるので、収録していない。）

これにより、韓天衡氏編著の『歴代印学論文選』に収められている『字古編』は、『宝顔堂秘笈』本、『太末竹素山房』本、『篆学瑣著』本を中心に、その中から一番出版年月の古い『宝顔堂秘笈』本を一番のよりどころとし、なされたものであることが分かる。しかし筆者は、再度これまで挙げてきた版本を洗いなおし、且つ出来るだけ多くの版本を元に比較研究し、既に現存しない『字古編』の原本を考察する必要があると考えに至った。

『字古編』のそれぞれの版本考察による調査により、結論として吾衍の印学著書『字古編』主要版本の系統図(図13)を以下のように作成した。



図13 『学子編』主要版本の系統図



注一、図表13の実線は、各本の系統を表している。

注二、大体同時代に刊行された『東門広牘』本・『宝顔堂秘笈』本・『王氏書苑補益』本は、『好古齋本』から直接影響を受けているのか、または間接的なか未だ立証できないでいる。よってこの部分は破線にて示した。

注三、矢印符号の両端に位置する版本は、版下が同じであるか、或いは影印本を表している。(例えば、『東門広牘』本と『叢書集成』本との関係、あるいは『広百川学海』本と『唐宋叢書』本との関係等。) また点線矢印が向かった先は、抄本をあらわしている。

注四、『唐宋叢書』本、『広百川学海』本と『説郛』本の版下は同じである。先にも述べたとおり、『説郛』本は、まえの二者より後に刊行したが、『唐宋叢書』本と『広百川学海』本とは、どちらが先か未詳である。もしかしたら順番が逆の場合もありうる。『思進齋叢書』本は、『唐宋叢書』本を底本としている。ただ、『学津討原』本は、さきの三つの版本のうちのいずれか一つを底本としていて、取り敢えず『説郛』本の下に置いた形を採っている。

五、おわりに

筆者は、これまでの研究者の研究成果を基礎として、また版本学の原理を運用し、文献資料に対する必要な考証を進めるために、さらに一歩進んだ流伝関係の考察といくつかの訂正を行った。それにより、版本的見地に立ち、それぞれの叢書の名称や版本の教からして、この『学古編』が元代以降、いかに重要視されていたかがよく理解できる。そのほか、前章の『学古編』版本の考証により、筆者は、現存する万暦年間の三種の版本が、今日我々が目にする事の出来るそれぞれの『学古編』に大きな影響を与えていることも突き止めることが出来た。

『学古編』は、吾衍が教学過程の中で、編撰したものである。大徳四年(一二三〇)に作られ、至正四年(一二三四)呉主二が彫版として刊行され、その後の隆盛に及んだといえる。その書首部分は、危素、夏溥の序が配置され、多くの人たちに篆刻の工具書として使用された。その吾衍『学古編』からは、随所に古印、特に漢印法をよりどころとし、「古法」、「渾厚(雄渾)」、「不可太怪(奇異に走り過ぎるべからず)」、「不可随俗(流行のみを追いつけるべからず)」などの助言を行っているのが伺える。このように吾衍の印学スタイルと古今の印学に精通している芸術思想は、これから先受け継ぐべきものであり、再度研究討議する必要があると考える。

最後に先人の印学及び書学研究の労苦に敬意を払い、それらが本論稿のさまざまな方面の手助けになっていることに感謝し、筆を置きたい。

¹ 各『学古編』版本の著者名は、大部分が「吾丘衍」或いは「吾邱衍」と記載されているが、本稿ではほとんどを本名の「吾衍」に統一した。拙稿「吾衍与其『学古編』之研究」、(中国美術学院博士論文、二〇〇九年五月、一〇一三〇頁による)。

² 陳国成「吾衍《三十五举》疏評」、吉林大学碩士學位論文、二〇〇六年四月。

³ 〔清〕姚覲元『三十五举』校勘記所収、『歷代印學論文選』、西泠印社出版社、一九八五年九月版。

⁴ 程二如『三十五举』新探所収、『西泠藝叢』第六期、西泠印社出版社、一九八二年十月版。

⁵ 馬国権『篆刻經典』三十五举 図釈所収、『書譜』双月刊、香港書譜出版社出版、一九八三年第一―三期。

⁶ 馬国権『続』三十五举 八種述評所収、『書譜』双月刊、香港書譜出版社出版、一九八六年第一―三期。

⁷ 朱関田『三十五举彙編』序所収、『書譜』双月刊、香港書譜出版社出版、一九八七年第一期。

⁸ 蕭高洪『吾丘衍の印論及印章芸術』所収、『中国篆刻』、一九九六年、総第八期。

⁹ 劉清揚『吾丘衍』三十五举 略論所収、『四川師範学院学报』(哲学社会科学版)、一九九八年第五期。

¹⁰ 陳国成『吾衍《三十五举》疏評』、吉林大学碩士學位論文、二〇〇六年四月、二―三頁。

¹¹ 陳国成『吾衍《三十五举》疏評』、吉林大学碩士學位論文、二〇〇六年四月、一六頁。

¹² 蔡宗憲『元代印人吾衍研究』、玄心印会、台湾、二〇〇六年六月。

¹³ 韓天衡『吾邱衍』学古編・附録辨偽所収、香港『書譜』総七〇期、香港書譜出版社出版、一九八六年版。

¹⁴ 黃惇『偽托何震的』統子古編辨訛所収、『中国篆刻』(創刊号)、荣宝斋出版社出版、一九九四年八月版。

¹⁵ 〔元〕吾丘衍『学古編』卷附録一卷、明周履靖編『夷門広牘』一百七種一百六十五卷(北京師範大学図書館蔵)、明万曆二十五年(一五九七)、金陵荆山書林刻本。その中の上巻『三十五举』の前に、危素太僕序、夏溥序及び吾丘衍自序がある。

¹⁶ 〔元〕吾丘衍『學古編』一卷附錄一卷、明周履靖編『夷門廣牘』一百七種一百六十五卷（北京師範大學圖書館藏）、明萬曆二十五年（一五九七）、金陵荆山書林刻本。

¹⁷ 〔元〕吾丘衍『學古編』一卷附錄一卷、明周履靖編『夷門廣牘』一百七種一百六十五卷（北京師範大學圖書館藏）、明萬曆二十五年（一五九七）、金陵荆山書林刻本。

¹⁸ 吳志淳、元明間廬州府無為州人，字主一。元末歷任靖安、都昌二縣，奏除待制翰林，爲權幸所阻。以避兵移家豫章，再遷浙江鄞縣東湖。入明不仕。工草書篆隸，亦能詩。

¹⁹ 〔元〕吾丘衍『學古編』一卷附錄一卷、明周履靖編『夷門廣牘』一百七種一百六十五卷（北京師範大學圖書館藏）、明萬曆二十五年（一五九七）、金陵荆山書林刻本。

²⁰ 即ち『復古編』卷（宋）張有撰、元至正六年吳志淳好古齋刻本，明楊折跋，七行，行二十四字，白口，左右双边。北京國家圖書館所藏。

²¹ 拙稿『吾衍与其『學古編』之研究』（中國美術學院博士論文、一二五頁を参照）。

²² 宋慈抱原著 項士元審訂『兩浙書畫考』、浙江人民出版社出版、一九八五年三月、一四四九頁。

²³ 上海圖書館編『中國叢書總錄・②子目』、上海古籍出版社出版、二〇〇七年三月、九三九頁。

²⁴ 上海圖書館編『中國叢書總錄・①總目』、上海古籍出版社出版、二〇〇七年三月、一〇八四頁。

²⁵ 陳國成『吾衍』三三五舉疏評、吉林大學碩士學位論文、二〇〇六年四月、十六頁。

²⁶ 吾丘衍撰〔清〕繆荃孫校『學古編』一卷（清抄本、上海圖書館所藏）。

²⁷ 李漁（一六一一—約一六七九）明末清初浙江蘭溪人，原名仙呂，字笠翁，入清，流寓金華、杭州、南京等地，終老于杭州。家沒戲班。所著『閑情偶寄』，包括戲劇理論、飲食・營造・園藝等。另有劇本『笠翁十種曲』、短篇小說集『十二樓』及雜著『一家言』等。所收『中國歷代人名大辭典』、上海古籍出版社出版、一九九九年十二月、九二五頁。

²⁸ 朱象賢、無錫舉人、嘉靖間、雷州通判性厚、革政收、苛取宿、弊民甚稱。便署郡年余、安靜不扰而郡事悉舉暇、即詣學宮、与諸生剖析經義、极其精確、諸生莫不歎服、升雲南南安知府。所収、〔清〕郝玉鄰等監修 魯曾煜等編纂『廣東通志』卷四十一、四庫全書本、史部、地理類、都會郡縣之屬。

²⁹ この「合用文籍品目」は、『宝顔堂秘笈』本においては、目錄を「文集」とし、本文を「文集」としている。中国語の発音からしてどちらも「wen」(第二声)「(第二声)」であり、どちらかが間違っている。『宝顔堂秘笈』本を踏襲している『說郛』本、『学津討原』本、『篆字瑣著』本は、本文に合わせて「文集」のかたちを取っている。そこで、意味から探っていくと、「文集」とは、〔南朝梁〕劉勰『文心雕龍』隱秀において、「凡文集勝篇、不盈十一；篇章秀句、裁可百。」³⁰ 又は、〔唐〕劉知幾『史通』裁文において、「而世之作者、恆不之察、聚彼虛說、編而次之、創自起居、成於國史、連章疎錄、一字無廢、非復史書、更成文集」などに見られるように「一家又は諸家の文を編輯した書籍」である。また、「文集」とは、孔安国『古文尚書・序』において「古者伏羲氏之王天下也、始画八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生也。」に見られるように「文書、書籍」を表す。この内容から見ると、後者のほうが正しいと考える。版本を比べてみると、『王氏書苑補益』本、『閑中』本、『篆字瑣著』本、『歷代印学論文選』、『中国書画全書』本を除く、だいたいすべての版本が「文集」と記してある。しかし、『夷門広牘』本には、『合用文籍(文集)品目』の記載がない。筆者は、多分明代万曆人が附録を作るにおいて上巻の『三十五舉』と区別するために「文集」としたか、または元々なかった『合用文籍(文集)品目』の見出しをつけたのではないかと考えたい。

³⁰ 拙稿『吾衍与其『学古編』之研究』(中国美术学院博士論文)、一〇〇頁。

³¹ 拙稿『吾衍与其『学古編』之研究』(中国美术学院博士論文)、一〇六一一〇七頁。

³² 〔清〕顧炎武著 黄汝成集釋 饒保郡・呂宗力校点『日知錄集釋』、上海古籍出版社出版、二〇〇七年九月版、一〇七六頁。

³³ 韓天衡訂『歷代印学論文選』所収『学古編』、西泠印社出版、一九八五年九月、十頁。